わが国北方の動物地理学上の諸問題

犬飼哲夫¹⁾

Zoogeographical Problems in Northern Japan

Tetsuo INUKAI¹⁾

BLAKISTON was the first who studied scientifically the distribution of mammals and birds in Hokkaido and in north-eastern part of the Main Land. He insisted from the zoological point of view that Hokkaido was once a part of Asiatic Continent. According to him Tsugaru Strait is an important line of demarcation of animal distribution in northern Japan (BLAKISTON, 1883). However, HATTA (1913) did not agree with BLAKISTON when he investigated Reptilian and Amphibian fauna of Sakhalin comparing with those of Hokkaido. For example the snake of Sakhalin is *Vipera berus* which occurs in northern part of Eurasian Continent while the snakes of Hokkaido are those which are very common in the Main Land. Therefore, he pointed that Soya Strait between Sakhalin and Hokkaido is zoogeographically more important than Tsugaru Strait.

There has been a confusion concerning the origin of animals in northern Japan. Recently *Salamandrella keyserlingii* which is a continental salamander has been found in Hokkaido. The pika and continental lizard, *Lacerta vivipara* have been also captured in Hokkaido. From this HATTA's opinion seems to be denied. BLAKISTON did not mention why the deer and the raccoon dog which are inhabitants of the Main Land are found in Hokkaido.

Recently paleontological as well as geological studies of Japan has been much advanced and it has been ascertained that in ancient glacial period either Soya Strait or Tsugaru Strait disappeared as a result of the lowering down of the sea level. Either BLAKISTON's theory or Hatta's opinion is recognizable when we take into account ancient geological changes of northern Japan.

However, we shall pay attention to the migration of animals by means of drift ice which has sometimes brought the fox from Kurile to Hokkaido.

わが国の北方における動物地理について、最初に科学的に論及したのはブラキストンである。彼が明治16年 (BLAKISTON, 1883) に京浜地方の来日外人を主として作られたいた Asiatic Society で「動物学上から見た日本列島とアジア大陸との大古における連絡の事実」すなわち Zoological indications of ancient connection of the Japanese Islands with the continent. という発表をしたものである。

ブラキストンは軍人出身であるが、狩猟を好んだアマチュア動物学者で、観察したり、採集したりした鳥獣の研究で、北海道のヒグマ、オオカミ、シマフクロウ、エゾヤマドリなどは、カラフト並にアジア大陸北方の動物で、本州にはこれらと異なるツキノワグマ、ニホンオオカ

ミ、キジ、ヤマドリなどがいて、津軽海峡ではっきり動物分布が分れていることを指摘し、北海道は古い時代には、カラフトと共に大陸に連絡していた半島の状態にあって、北方大陸動物は、津軽海峡で南下をばまれていたと想像した。この発表以来津軽海峡をブラキストン線と呼ぶようになった。

その後わが国は近代科学の研究に覚めて、多くの優れた学者が出て、国内の動物の研究も著しく進展し、動物相が一層明らかになりブラキストン説に疑義が持たれ出した。その中で北大の故八田博士 (元東北帝国大学農科大学教授、後に北海道帝国大学教授) は、日露戦争の結果日本の領土となったカラフトの研究もなし、大正2年 (HATTA, 1913) にドイツで、ブラキストン線に対する反

1) 北海道開拓記念館 (Historical Museum of Hokkaido)

駁の論文を発表した。

八田博士の説は、ブラキストンは移動し易い動物の鳥獣の研究を基礎としているが、北海道のヒグマが、天塩沿岸から海上を泳いで20キロ沖の利尻島に達した例もあるから論拠が薄弱である。それよりもあまり移動しない、また進化の歴史の古い爬虫類や両生類を比較する必要がある。爬虫類ではカラフトのトカゲ（コモチカナヘビ）、マムシ、両生類ではカラフトヒキガエルなどは、全く大陸のものと同一種類である。然るに北海道の爬虫類のカナヘビ、トカゲ、アオダイショウ、シマヘビ、マムシ、両生類のアマガエルなどはカラフトにはいないが、本州には同じものがいる。だから北海道とカラフトの間の宗谷海峡を、むしろブラキストン線というべきである。以上が八田博士の主張で、宗谷海峡が八田線といわれるようになったのはそれからである。

八田説の後に、さらにいろいろな新しい動物が発見されて、八田線にも疑義が生じ、北方の動物地理は、ますます混乱を来とし、いづれの説を採用すべきか決定しかねる状態になった。

先づ犬飼は大正14年（1924）にカラフトでキタサンシヨウウオ *Salamandrella Keyserlingii* を採集し、これが大陸のものと同種であることを確めた（INUKAI, 1927）。さらに犬飼は昭和5年（1930）に、北海道の山岳地帯で、大陸の古い動物とされていたナキウサギ *Ochotona* を発見し、続いて同6年（INUKAI, 1931）にカラフトからも発見した。また井上元則は昭和18年（1943）に十勝三叉で、大陸からカラフトにかけて生息するキツツキの一種ミユビゲラ（キゲラ）を採集し（井上, 1948）、戦後には北大農学部動物学教室の者達が、同じ地方でミユビゲラの巣を発見した。

近年（昭和30年）になってさらに奇怪にも美甘は釧路原野でキタサンシヨウウオを採集し発表した（MIKAMO, 1955）。犬飼はこれが釧路原野に相当多数生息することを確認、帯広畜産大学の芳賀教授も、十勝の上士幌で採集したから道東には相当広く生息すると思われる。また昭和38年から引続き天塩のサロベツ原野並にその隣接地で、コモチカナヘビが採集された（犬飼ほか, 1972）。

こんな状態で八田線の意義も怪しくなったように思われ出した。ところで現在になって日本列島の地史の研究が急速に進み、太古のある時代には宗谷海峡も津軽海峡もなく、大陸—カラフト—北海道—本州と陸続きであったし、ある時代には大陸—カラフト—北海道と続き、またある時代には大陸—カラフトだけが続いていたことなどが明らかになった。だからある時代にはブラキストン

説がほんとうで、またある時代には八田説がほんとうであったことになる、それはともかくとしてブラキストンも八田博士も動物の分布を研究しただけで、日本列島と大陸の地史の関係を推察したのは敬服に値する。一時北方の動物地理及びその由来について混乱を招いたのは、動物分布の研究が先行し、地史の研究が平行して行なわれなかったためである。

動物地理学上の諸問題は今後徐々に解決されると思われるが、現在まで不問のまま放置されていた本州の山岳にいるエゾイタチ（オコジョ）やイイズナイタチ（コエゾイタチ）とか、ライチョウなどの起源は津軽海峡のなかった時代に南下したものの残党と思われる、北海道にいるニホンジカやタヌキなども本州と陸続きであった時代に移行したと思われる。しかしいつの時代にどんな動物が移動したかは、今後の研究に待たねばならない。要するに北方の動物地理上の問題は、ブラキストンや八田博士が考えたより非常に複雑であるのである。

以上述べたことは動物地理と地球の水河期における海水面の上下と密接の関係にあったことを物語るが、なおこの外に地球上におこる天災地変はもとより、様々な物理的、気象的異変が動物分布に思わぬ影響のあることも考え得る。その一例として、北洋の流水が挙げられる。最近根室地方に、人体に寄生し不治といわれるエキノコックス症の発現があつて、人々に恐怖を与えている。少なくとも10年前にはこの地方にはこの病気がなかった。それが突如として現れたのは、流水のためとしか考えられない。というのはエキノコックス症をおこす寄生虫の親虫はキツネに寄生していて、千島には以前から、これが寄生したキツネがいることが知られていた。最近には特に流水の多い年があつて、しばしば根室海峡が流水で埋められることがあつた。この時に身体の軽いキツネは容易に流水の上を渡って国後島から、知床方面に来ることが出来、実際にそれを見た人もいる。

太平洋戦争の最中であつたが、北見の沿岸にトナカイの死体が漂着したことがあつたが、カラフト北部のオホーツク海の雪原の上に迷い出たトナカイが、雪原が破れて流水になって南下して来た時に、そのまま上に乗って来たと思われる。前に述べた八田博士の引用した利尻島まで泳ぎ渡ったヒグマなども、著しい例である。このようなことは極めて稀ではあるが、動物地理学上では無視出来ない現象である。あえて流水でなくても、何かの大きな異変で、陸の一部が島のようになって漂流することもあり得るから、動物地理学では、十分な地史の研究を伴わなければ、簡単に結論を出し得ない。

引用文献

- BLAKISTON (1883) Zoological indications of ancient connection of the Japanese Island with the continent. *Trans. Asiat. Soc. Jap.* **2**, 126—140.
- HATTA, S. (1913) Zur Tiergeographie von Hokkaido. *Zool. Anz.* **43**, (1), 27—36.
- INUKAI, T. (1927) On the *Urodelan* fauna of Sakhalin. *Copeia* (U. S.) Aug. 1927, 1—2.
- INUKAI, T. & SHIMAKURA, K. (1930) On *Ochotona*, a new rodent unrecorded from Hokkaido. *Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc.*, **11**, (2), 115—118.
- INUKAI, T. (1931) A record of *Ochotona* from Sakhalin. *Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc.* **12**, (1), 6—8.
- INUKAI, T. (1932) Distribution of *Ochotona* so far discovered in Hokkaido and Sakhalin. *Proc. Imp. Acad.*, **28**, (6), 255—258.
- 犬飼哲夫ほか (1972) サロベツ総合調査報告書 (泥炭地の生態・コモチカナヘビの記). 北海道開発局.
- 井上元則 (1948) エゾミユビゲラ発見記. 野鳥, **12**, (2), 2—3.
- MIKAMO, K. (1955) The occurrence of *Salamandella keyserlingii* Dybowski in Hokkaido. *Ann. Zool. Jap.*, **28**, (1), 44—47.